

浄土真宗本願寺派勤行 經文・意識・作法説明付

ぶつせつかんむりようじゆきよう

仏説觀無量壽經 法事用

○は調声(リーダー)が読む。●より一緒に読む。

合掌・礼拝・經本を頂く キン二打

三奉請

ぶじようみ だによらいにうどうじよう さんげらく

○奉請弥陀如来入道場●散華樂

一一「一一」ノ「」フ

あみだによらい

阿弥陀如来、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

ぶじようしやかによらいにうどうじよう さんげらく

○奉請釈迦如来入道場●散華樂

一一「一一」ノ「」フ

しやかによらい

釈迦如来、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

ぶじようじつぼうによらいにうどうじよう さんげらく

○奉請十方如来入道場●散華樂

一一「一一」ノ「」フ

ほとけがた

全ての仏方、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

キン一打 作相 キン二打 表白 キン一打

ぶつせつかんむりようじゆきよう
○ 仏説觀無量壽經

そうげんかちゆうきようりようやしやく
宋元嘉中 璽良耶舍記

そう
宗の時代(五世紀前半)に 璽良耶舍(けんこう なんきん)が建康(南京)にて訳す

しよぶん しよしんしよ
序分 証信序……お経の内容を証明する

によぜがもん
● 如是我聞・

私はこのように聞きました。

しよぶん ほつきじよ けせんしよ
序分 發起序 化前序……お釈迦様が待機されている場所を説明する

いちじぶつざいおうしやじよう きしやくつせんじゆう よだいびくしゆ せんにひやくごじゆうにんく ぼさつさんまんにせん もんじゆしりほうおうじ
一時 仏在王舎城・耆闍崛山中・与大比丘衆・千二百五十人俱・菩薩三万二千・文殊師利法王子・

しやか
ある時、お釈迦様がマガダ国首都王舎城の近くの耆闍崛山におられ、一二五〇人の弟子たちとおられました。

にいじようしゆ
而為上首・

もんじゆぼさつ
また、文殊菩薩をはじめとして、三万二千人の菩薩もおられました。

しよぶん ほつきじよ ごんぶえん
序分 發起序 禁父縁……王舎城で王子が父頻婆娑羅を幽閉する

にいおうしやだいじよう ういちたいし みようあじやせ すいじゆんじようたう あくうしきよう しゆしゆぶおう ひんばしやら ゆへいち おしちじゆう
爾時王舎大城・有一太子・名阿闍世・隨順調達・惡友之教・収執父王・頻婆娑羅・幽閉置於・七重

おうしやじよう

あじやせ

だいはだつた

びんばしやらおう

その時、王舎城には阿闍世という王子がいました。悪友の提婆達多にそそのかされ、父の頻婆娑羅王を捕らえ、七重に囲われた牢獄に閉じ込めました。

しつない せいしよくんしん いっぱとくおう こくだいふにん みよういたいけ くきようだいおう そうよくしやうじよう いそみつわしよう ようずこ

室内・制諸群臣・一不得往・国大夫人・名韋提希・恭敬大王・澡浴清浄・以酥蜜和麴・用塗其

家臣に命じ、誰も王に会うことを許しませんでした。妃の韋提希夫人は、王の身を案じ、自分の身体を洗い清め、

小麦粉に蜂蜜や牛乳を発酵させたものを練り混ぜて、自らの身体に塗り、

しん しやうらくちゆう じようぶどうしやう みつじようおう に じだいおう じきしやうおんしやう ぐすいしゆく しゆくくひつち がつしやうくきよう

身・諸瓔珞中・盛蒲桃漿・密以上王・爾時大王・食麴飲漿・求水漱口・漱口畢已・合掌恭敬・

胸飾りにはぶどうの汁を入れ、密かに王のもとに行きそれらを差し上げました。王は食し、水で口を濯いでから、

こうきしやくつせん ようらいせせん に させこん だいもつけんれん ぜ ごしんぬ がんこうじひ じゆがはつかい じもつけんれん

向耆闍崛山・遥礼世尊・而作是言・大目犍連・是吾親友・願興慈悲・授我八戒・時目犍連・

ぎしやくつせん

がしやう

しやか

らいはい

もくれんそんじや

じひ

耆闍崛山の方を向き合掌し、お釈迦様に礼拝をして言いました。「目連尊者は我が親友です。どうかお慈悲によつ

はっさいかい

て、私に八斎戒をお授けになり、一日一日を安らかに過ごせるようにしてください。」その時、目連尊者は

によおうじゆんび しつしおうしよ にちにちによぜ じゆおうはつかい せそんやつけん そんじやふ るな いおうせつぼう によぜ じけん きよう

如鷹隼飛・疾至王所・日日如是・授王八戒・世尊亦遣・尊者富楼那・为王說法・如是時間・経

鷹や隼が飛んできたかのようにすぐに王のもとに現れました。そして、毎日毎日八斎戒を授けました。また、お

はっさいかい

しやか

せつぼう

ふる なそんじや

ぶつぼう

釈迦様は説法一番の富楼那尊者を遣わして、王の為に仏法を説かせました。

さんしちにち おうじきしようみつ とくもんぼうこ げんしきわえつ

三七日・王食麴蜜・得聞法故・顔色和悦・

三週間が過ぎ、王は食事もでき、仏法を聞くことができたので生き生きとし悦びに満ち溢れていました。

序分 発起序 禁母縁……母韋提希が軟禁される

時阿闍世・問守門者・父王今者・猶存在耶・時守門人・白言大王・国大夫人・身塗麴蜜・瓔珞盛漿

阿闍世王は門番に聞きました。「父はまだ生きていますのか。」門番は答えました。「韋提希様が密かに食べ物を与え

持用上王・沙門目連・及富楼那・從空而來・為王說法・不可禁制・時阿闍世・聞此語已・怒其母曰

ておられます。また、目連尊者や富楼那尊者が空からやってきて王に仏法を説いておられます。私などではお止め

することはできません。」阿闍世王はこれを聞くと激怒しました。「母は賊である。

・我母是賊・与賊為伴・沙門惡人・幻惑呪術・令此惡王・多日不死・即執利劍・欲害其母・時有一

賊の味方をする尊者達も悪人である。幻惑の呪術を用いて父を何日も生かしておくとは。」阿闍世王は剣を取

り、母を殺そうとしました。その時、聡明で知識がある

臣・名曰月光・聡明多智・及与耆婆・為王作礼・白言大王・臣聞毘・陀論經說・劫初已來・有諸惡

月光という大臣が耆婆大臣と共に阿闍世王に礼をしてから言いました。「王様、私共の知るところによりますと、

古より多くの悪王が生まれ、王位を乗つ取ろうと父を殺害した者は

おう どんごく い こ せつが い ご ぶ いちまんはつせん みぞうもんぬ むどうが い も おうこん い し せつぎやくし し おせつりし しんぶ

王・貪国位故・殺害其父・一万八千・未會聞有・無道害母・王今為此・殺逆之事・汚利利種・臣不

一万八千人に及びます。しかし、未だ母を殺した者は聞いたことがありません。今、王様が母君を殺めるといふの

であれば、大変な汚れとなりましよう。聞くに堪えません。人間のすることではありません。

忍聞・是梅陀羅・不宜住此・時二大臣・説此語竟・以手按劍・却行而退・時阿闍世・驚怖惶懼・告

もはやここにすることはできません。」大臣達は、劍に手を添えながら、ジリジリと後ずさりをしました。阿闍世王

は驚いて耆婆大臣に言いました。

耆婆言・汝不為我耶・耆婆白言大王・慎莫害母・王聞此語・懺悔求救・即便捨劍・止不害母・勅語

「お前は私のもとを離れるのか」耆婆大臣は答えました。「王様、どうか母君だけは手をかけないでください。」こ

れを聞いた阿闍世王は懺悔し、劍を捨て、思いとどまりました。

内官・閉置深宮・不令復出・

そして、家臣に命じ、王宮の奥深くに閉じ込め、外へ出ることができないようにしました。

序分 發起序 厭苦縁

章提希のもとにお釈迦様が訪れる

じいだいけ ひゆうへいい しゆうしゆうすい ようこうきやくつせん いぶつさらい にさせこん によらいせせん ざいしやくしじ
時韋提希・被幽閉已・愁憂憔悴・遙向耆闍崛山・為仏作礼・而作是言・如來世尊・在昔之時・

こうして幽閉された韋提希夫人は、悲しみや焦りのあまり疲れ果てていました。遙か遠くの耆闍崛山の方を向

き、お釈迦様に礼拝し申し上げました。「お釈迦様、昔から

恒違阿難・來慰問我・我今愁憂・世尊威重・無由得見・願遣目連・尊者阿難・与我相見・

よく阿難尊者をお遣わしになり私を慰めてくださいましたが、今、私は深く落ち込んでいます。お釈迦様をお呼

びすることは恐れ多いので、目連尊者と阿難尊者をお遣わしてください。」

作是語已・悲泣雨淚・遙向仏礼・未拳頭頃・爾時世尊・在耆闍崛山・知韋提希・心之所念・即勅

韋提希夫人が雨のように涙を流しながら、お釈迦様の方を向き礼拝をしました。すると、頭を上げないうちに、

耆闍崛山におられたお釈迦様がその心を知り、すぐに

大目犍連・及以阿難・從空而來・仏從耆闍崛山沒・於王宮出・時韋提希・礼已拳頭・見世尊・釈

目連尊者と阿難尊者を遣わし、ご自身も耆闍崛山から王宮においてになりました。韋提希夫人が頭を上げると、

迦牟・尼仏・身紫金色・坐百宝蓮華・目連侍左・阿難在右・釈梵護世諸天・在虛空中・普雨天華・

そこにはお釈迦様がおられました。お体は金色に光り輝き、宝玉の蓮華にお座りになられ、左に目連尊者を、右

あなんそんじや

たいしゃくてん

ぼんてん

してんのう

に阿難尊者をお従えになられました。帝釈天や梵天や四天王達は空中におられ、花を降らして

じようくよう じいだいけ けんぶつ せせん じせつ じようらく こんとうじ ぎうきゆう じようぶつ ひやくこん せせん がしゆく がざい じようし
持用供養・時韋提希・見仏世尊・自絶璽珞・拳身投地・号泣向仏・白言世尊・我宿何罪・生此

くよう

いだいけ ぶにん

しゃか

供養をなさいました。韋提希夫人はお釈迦様を見ると、自ら飾り物を捨て、手足を地につけ、泣きながらお釈迦

様に申し上げました。「お釈迦様、私は一体何の罪があつて

しゃか

あくし せせんぶう がとういんねん よだいば だつた ぐいけんぞく

惡子・世尊復有・何等因縁・与提婆達多・共為眷属・

このような悪い子を産んだのでしょうか。お釈迦様もまた、何の因縁で提婆達多とご親戚なのでしょうか。

しよぶん ほうきしよ こんじやうえん

いだいけ

こくらくじようど

いんねん

だいば だつた

しんせき

序分 發起序 欣浄縁……韋提希が極樂浄土を願う

ゆいがん せせん いが こうせつ むうのうしよ がとうおうじよう ふぎようえん ぶだい じよくあくせや しじよくあくしよ じごく がき ちくしようよう

唯願世尊・為我広説・無憂惱死・我当往生・不樂閻浮提・濁惡世也・此濁惡死・地獄餓鬼・畜生盈

どうかお釈迦様、私の為に悩みのない世界を教えてください。私はその世界に生まれたい。この濁りの世を離れたいの

しゃか

じごく がき ちくしよう

です。この世は地獄・餓鬼・畜生のような

にこ

満・多不善聚・願我未來・不聞惡声・不見惡人・今向世尊・五体投地・求哀懺悔・唯願仏日・教我

罪を犯し、欲にまみれている者で満ち溢れています。私はもう二度とこれらの声を聞いたり姿を見たくありません。

まん たふせん じゆ がん がみらい ふもんあくしよう ふけんあくにん こんこう せせん ぐたいとうじ ぐあいさんげ ゆいがん ぶつにち きよう が

今、お釈迦様に私の全てを持って礼拝し、お慈悲を請います。

しやか

らいはい

じひ

しやか

らいはい

じひ

しやか

らいはい

じひ

しやか

らいはい

観於・清浄業处・爾時世尊・放眉间光・其光金色・徧照十方・無量世界・還住仏頂・化為金台・如

どうか清らかな世界をお見せください。」その時お釈迦様の眉間の白毫から金色の光が放たれました。すべての世

界を照らし、お釈迦様の頭の上に戻り、金色の台と成りました。それは世界の中心にそびえる

須弥山・十方諸仏・浄妙国土・皆於中現・或有国土・七宝合成・復有国土・純是蓮華・復有国土・

須弥山の様です。そこに、すべての清らかなみ仏の国々が現れました。七つの宝でできた国、蓮の花で満ちた国、

如自在天宮・復有国土・如玻瓈鏡・十方国土・皆於中現・有如是等・無量諸仏国土・嚴頭可觀・

他化自在天の宮殿のような国、水晶の鏡のような国など様々です。み仏の国の美しさをお見せになったのです。

今韋提希見・時韋提希・白仏言世尊・是諸仏土・雖復清浄・皆有光明・我今樂生・極樂世界・

韋提希夫人は申し上げました。「お釈迦様、み仏の世界は清らかで光で満ちていますが、その中でも極樂世界の

阿弥陀仏所・唯願世尊・教我思惟・教我正受・

阿弥陀仏の所に生まれたい。どうか私に極樂世界を想う方法を教え、お徳を受ける方法を教えて下さい。」

序分 發起序 散善頌行縁……極樂へ生まれる方法をおおまかに説く

爾時世尊・即便微笑・有五色光・從仏口出・一一光照・頻婆娑羅頂・爾時大王・雖在幽閉・心眼無

しゃか

ごしき

びんばしやらおう

これを聞いたお釈迦様は微笑まれ、口から五色の光が放たれ、その一つ一つが頻婆娑羅王の頭を照らしました。その時の大王は幽閉されましたが、心の眼で

しょう しょうけん せせん すめん さらい じねん ぞうしん じょうあなこん に じせせん ごう いたいけ によこん ちふ あみだぶつ

障・遙見世尊・頭面作礼・自然増進・成阿那含・爾時世尊・告韋提希・汝今知不・阿弥陀仏・

しゃか

遠くのお釈迦様を見ることができ、頭を地につけ礼拝しました。そして自ずと迷いの世には戻らない位に至ったので

しゃか

いたいけぶにん

あみだぶつ

す。その時、お釈迦様は韋提希夫人に仰せられました。「そなたは知っているか。阿弥陀仏は

こしふおん によとうけねん たいかん ひこく じようこうじようしゃ がこんいによ こうせつしゆひ やくりようみらいせ いっさいばんぶ よくしゆじよう

去此不遠・汝当繫念・諦觀彼国・淨業成者・我今為汝・広説衆譬・亦令未來世・一切凡夫・欲修淨

ごくらくじようど

あみだぶつ

遠くにいるわけではない。そなたは心を集中して、極樂淨土の阿弥陀仏を心に映し出すのだ。私はそなたの為に、

きん

その方法を説く。また、未来に清らかな行を願う者たちを

ごうしゃ とうしうさいほう ごくらつこくど よくしよう ひこくしゃ どうしゆさんぶく いっしやきさうようぶ も ぶ じしちよう じしんふせつ しゆ

業者・得生西方・極樂国土・欲生彼国者・当修三福・一者孝養父母・奉事師長・慈心不殺・修

さいほうごくらくじようど

ごくらく

西方極樂淨土に生まれさせよう。極樂に生まれたい者は、三つの善い行いをするがよい。一つは、親孝行をし、師や

年上によく仕え、優しさを持って生き物を殺さず、怒らず、盗らず、飲まずなどの十の善い行いを行うこと。

じゅうぜんごう にしやじゆじさんき ぐせくしゆかい ふぼん いき さんじやほつぽだいしん じんしんいんが とうじゆだいじよう かんじんきようじや

十善業・二者受持三歸・具足衆戒・不犯威儀・三者發菩提心・深信因果・誦誦大乘・勸進行者・

ぶつぼうそう

さんきえ

かい

さん

いんが

二つは仏法僧の三歸依をし、戒を守り、行いを正しくすること。三つは、悟りを求める心を起こし、因果を深く信

じ、大乘の經典を読み、人々に勧めること。煩惱盛んな者には難しいであろうが、

によしさんじ みよういじようこう ぶつこういだいけ によこんちふ しさんじりこう かこみらいけんさい さんぜしよぶつ じようこうしやういん
如此三事・名爲淨業・仏告韋提希・汝今知不・此三種業・過去未來現在・三世諸仏・淨業正因・

これらを善き行いと言うのだ。」続けてお釈迦様は言われました。「そなたは知っているか。これらの行いは過去現在

ほとけ

未来の仏がたの正しい行いであり、み仏になる方法なのだ。達成することは困難である」

ほとけ

しよぶん ほつきじよ じようせんじかんえん
序分 發起序 定善示觀緣……極樂淨土を見る方法を説く

ぶつこうあなん きゆういだいけ たちようたいちよう ぜんしねんし によらいこんじや いみらいせ いっさいしりじよう いぼんのうぜく ししよがい
仏告阿難・及韋提希・諦聽諦聽・善思念之・如來今者・為未來世・一切衆生・為煩惱賊・之所害

しやか あなんそんじや いだいけぶにん

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「しっかりとよく聴いて、これを念じなさい。私は今、煩惱に

ぼんのう

ぎよう

ぎよう

なもあみだぶつ

悩む未来のすべての者の為に清らかな行を説く。これらの行の難しさを知り、南無阿弥陀仏の念仏の素晴らしさ

しや せつしやうじようこう ぜんさいいだいけ けもんしじ あなんによどうじりじ こういたしり せんぜつぶつこ によらいこんじや きよういだい
者・説清淨業・善哉韋提希・快問此事・阿難汝当受持・広為多衆・宣説仏語・如來今者・教韋提

を知るがよい。善いぞ韋提希夫人、よく尋ねてくれた。阿難よ、私が説く教えを覚え、多くの者たちの為に広める

いだいけぶにん

あなん

がよい。私は今、韋提希夫人と未来のすべての者たちが、

いだいけぶにん

けしきりみらいせ いっさいしりじよう かのさいほう ごくらくせかい いぶつりつこ どうとくけんび しやうじまうこくど によしりやみようきよう じ
希・及未來世・一切衆生・觀於西方・極樂世界・以仏力故・當得見彼・清淨国土・如執明鏡・自

さいほうごくらくせかい

ほとけ

西方極樂世界を觀れるようにしよう。み仏の力で清らかな世界を見ることができるとだ。くもりのない鏡で自分

の姿を映し出すように。

けんめんぜう けんびこくと ごくみょうらくし しんかんきこ おうじそくとく むしようほうにん ぶつこういだいけ によせほんぶ しんそうるい
見画像・見彼国土・極妙樂事・心歡喜故・忒時即得・無生法忍・仏告韋提希・汝是凡夫・心想羸
ごくらくじょうど

極樂淨土の素晴らしい景色を見て、歡喜し、悟りを得るであらう。」お釈迦様は韋提希夫人に仰せられました。

「そなたは弱い人間だ。煩惱があり、すべてを見通す天眼通を得ていないから、

ほんのう てんげんづう

れつ みとくてんげん ふのうおんかん しよぶつによらい ういほうべん りやうによとつけん しいだいけ ひやくぶつこんせせん によがこんじやい

劣・未得天眼・不能遠觀・諸仏如來・有異方便・令汝得見・時韋提希・白仏言世尊・如我今者・以

遠くを觀ることができない。しかし、み仏は様々な手段を持っているから、そなたは見えるようになる。」韋提希

ほとけ

いだいけ

ぶにん しゃか

夫人はお釈迦様に申し上げました。「お釈迦様、私は今、み仏のお力で

ほとけ

ぶつりつこ けんびこくと にかくぶつめつこ しよしゆじょうどう じよくあくふせん ごくしよひつ うんがとうけん あみだぶつ ごくらくせかい

仏力故・見彼国土・若仏滅後・諸衆生等・濁惡不善・五苦所逼・云何當見・阿彌陀仏・極樂世界・

ごくらくじょうど

極樂淨土を見れました。しかし、あなた様がこの世を去られた後の人々は、悪い行いとしても善い行いはずに苦

しむでしよう。そうなればその者たちはどうやって阿彌陀仏の極樂淨土を見ることができなのでしょうか。」

あみだぶつ ごくらくじょうど

キン三打

正宗分 定善 華座觀

あみだぶつ

阿彌陀仏が空中に現れる

ぶつこうあなん ぎゅういだいけ たいちやうたいちやう ぜんしねんし ぶつとういによ ふんべつけせつ じよくのうほう によとうおくじ こういだい

○仏告阿難・及韋提希・諦聽諦聽・善思念之・仏當為汝・分別解説・除苦惱法・汝等憶持・広為大

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せになりました。「よく聴けよく聴け、よくこれを念じてくれ。私はそな

たたちの為に苦悩を除く方法を説く。そなた達はよく覚えて広く人々の為に

しゅう ふんべつげせつ せつせごじ むりようじゆぶつ じりゅうくじりゅう かんぜおん だいせいし ぜにだいし じりゅうさう こうみようし

衆・分別解説・説是語時・無量寿仏・住立空中・觀世音・大勢至・是二大士・侍立左右・光明熾

説き広めるのだ。」「こう言われた時、阿弥陀仏が空中でお立ちになりました。左右には觀世音菩薩と大勢至菩

あみだぶつ

かんぜおんぼさつ

だいせいし

薩が付き従っていました。光明はまばゆく、

じよう ふかぐけん ひやくせんえんぶだんこんじき ふとくいひ じいだいけ けんむりようじゆぶつち せつそくさらい ひやくぶつこんせせん が

盛・不可具見・百千閻浮檀金色・不得為此・時韋提希・見無量寿仏已・接足作礼・白仏言世尊・我

見ることができません。百千の金色も比べものになりません。韋提希夫人は阿弥陀仏を拝見し、お釈迦様の足に頭

こんじき

いだいけぶにん

あみだぶつ

しゃか

をつけ礼拝をしました。そして韋提希夫人は申し上げました。「お釈迦様、私は

らいはい

いだいけぶにん

しゃか

今因仏力故・得見無量寿仏・及二菩薩・未来衆生・当云何觀・無量寿仏・及二菩薩・仏告韋提希・

こんいんぶつりつこ とっけんむりようじゆぶつ きゆうにぼさつ みらいしじりよう どううんが かん むりようじゆぶつ きゆうにぼさつ ぶつこういだいけ

今、あなたのお力で阿弥陀仏と二人の菩薩を拝見することができました。未来の人々はどうやって見ることでき

あみだぶつ

ぼさつ

るのでしょうか。」「お釈迦様は韋提希夫人に仰せになりました。

しゃか

いだいけぶにん

欲觀彼仏者・当起想念・於七宝地上・作蓮華想・令其蓮華・一一葉・作百宝色・有八万四千脈・

よっかん ひぶつしゃ どうきせうねん おしつぼうじりよう されんげせう りようこれんげ いちいちよう さひやつぼうしき うはちまんしせんみやく

むりようじゆぶつ

「無量寿仏を拝見したい者は、これらを思い描くがよい。七つの宝の大地の上に、蓮華を想い浮かべ、花びらが一枚

れんげ

一枚百の宝の色で輝いていると想うがよい。また八万四千の筋があり、

ゆによてんえ みやくう はちまんしせんこう りようりまつふんみさう かいりようどっけん けようしうしや しゆこうにひやくこじゆう ゆじゆんによぜれんげ

猶如天画・脈有八万四千光・了了分明・皆令得見・華葉小者・縱広二百五十由旬・如是蓮華・

天の絵のようである。筋には八万四千の光があり、それらを一つ一つはつきりと見る事ができるようにするのだ。

花びらは小さいものでも縦横二百五十由旬である。このような蓮華に

ゆじゆん

れんげ

うはちまんしせんよう いちいちようけん かくうひやくおく まにしゆおう いちようじき いちいちまに ほうせんこうみよう ごこうによがい しつぼう

有八万四千葉・一一葉間・各有百億・摩尼珠王・以為映飾・一一摩尼・放千光明・其光如蓋・七宝

八万四千の花びらがついている。花びらと花びらの間には百億の宝玉で飾られている。それぞれの宝玉が千の光を放

てんがい

っている。その光は七つの宝でできた天蓋のように、

こうじよう へんぶじよう しやかひりようがほう いいごだい しれんげだい はちまんこんこう けんしゆくかほう ぼんまにほう みようしんじゆ

合成・徧覆地上・釈迦毘楞伽宝・以為其台・此蓮華台・八万金剛・甄叔迦宝・梵摩尼宝・妙真珠

しやかひりようがほう

れんげ

こんごうほう

けんしゆくがほう

ぼんまにほう

地上をくまなく覆っている。釈迦毘楞伽宝は蓮華の台となり、八万の金剛宝や甄叔迦宝や梵摩尼宝や真珠の網で

もう いいきようじき おごだいじよう じねんにう しちゆほうどう いちいちほうどう にひやくせんまんのく しゆみせん どうじようほうまんによや

網・以為交飾・於其台上・自然而有・四柱宝幢・一一宝幢・如百万億・須弥山・幢上宝幔・如夜

しゆみせん

飾られている。その台の上に四本の宝柱がある。それぞれ百万億の須弥山を重ねたように高い。その上の宝の幕は

まてんぐ うごひやくおく みみようほうしゆ いいようじき いちいちほうしゆ うはちまんしせんこう いちいちこう さはちまんしせん いしゆ

摩天宮・有五百億・微妙宝珠・以為映飾・一一宝珠・有八万四千光・一一光・作八万四千・異種

夜魔天のようだ。五百億の素晴らしい宝玉で飾られている。それぞれの宝玉は八万四千の光を放ち、それぞれの光は八万四千の違ちがう

金色こんじき・一一金色いちいちこんじき・徧其宝土へんごほうど・处处变化しよしよへんげ・各作異相かくさいそう・或為金剛台わくいこんこうだい・或作真珠網わくさしんじゅもう・或作雜華雲さくさざつけうん・於十方おじつほう

金色こんじきに輝きらいている。それぞれの金色は宝の大地に満ち、いたるところで様々な姿となる。金剛こんこうの台となったり、あるいは

は真珠の網となり、あるいは様々な花の雲となる。あらゆる方向において、

めんめんずいへんげんしきぶつじぜいけさみようだいしちかんぶつごうあなんによしみようけぜほんほうぞうびくがんりきしよ
面・随意変現・施作仏事・是為華座想・名第七観・仏告阿難・如此妙華・是本法藏比丘・願力所

思おもいのままに变化へんげしみ仏ほとけのはたらきを表す。これを華座想といい第七の観と名付ける。『お釈迦様は阿難尊者に仰

せられました。「これらの花は、法藏菩薩の願力により出来上がったのだ。

じようじようにやくよくねんびぶつしやどうせんさしけさうさしせうじふとくざつかんかいおういちいかんしいちいちよーいちいちしりー
成・若欲念彼仏者・当先作此華座想・作此想時・不得雜觀皆忘一一觀之・一一葉・一一珠・

もし、阿弥陀仏を想い描きたいと願うならば、まず、この華座想をしなさい。これをするときには、雑に行つてはな

らない。皆一つ一つ丁寧に観ていかねばならない。一つ一つの花びら、一つ一つの宝玉、

いちいちこーいちいちだーいいちいちどーかいりようふんみようによおきようちりうじけんめんぞうしせうじようしやめつじよごまんこうしようじしさい
一一光・一一台・一一幢・皆令分明・如於鏡中・自見面像・此想成者・滅除五万劫・生死之罪・

一つ一つの光、一つ一つの台座、一つ一つの柱を丁寧に描いて、鏡に自分の姿が映し出されたようにはっきりと想い描かねばならない。これができれば、五万劫ごまっけつの迷いの罪が消え、

必かならず定じやう当とう生しやう・極ごく樂らく世じやう界かい・作さく是し觀くわん者しや・名な為ゐ正しやう觀くわん・若も他た觀くわん者しや・名な為ゐ邪じや觀くわん・

必かならずず極ごく樂らく淨じやう土どに生まれることが出来る。この觀くわんを正しやう觀くわんといい、でなければ邪じや觀くわんという。」

正しやう宗しゆ分ぶん 定じやう善ぜん 像ざう觀くわん……阿あ弥み陀だ仏ぶつの像ざうを想おもう

仏ぶつ告こ阿あ難なん・及き韋ゐ提だい希し・見けん此し事じ已い・次じ当とう想しやう仏ぶつ・所しよ以い者しや何が・諸しよ仏ぶつ如に来らい・是ぜ法ぽう界かい身しん・入に一いつ切けつ衆しゆ生じやう・心しん想ぞう

お釈迦しやか様さんは阿あ難なん尊そん者じやと韋ゐ提だい希し夫ふ人にんに仰おほせられました。これが終われば、次にみ仏みぶつを想おもい描えきなさい。何故ななら、

あらゆるみ仏みぶつは自在じざいに動き姿すがたを変かえる。すべての人々の心にも表あらわれよう。

中ちゆう・是ぜ故こ汝にょ等どう・心しん想ぞう仏ぶつ時じ・是ぜ心しん即そく是ぜ・三さん十じゆう二に相しやう・八はち十じゆう随ずい形ぎやう好こう・是ぜ心しん作さく仏ぶつ・是ぜ心しん是ぜ仏ぶつ・諸しよ仏ぶつ正しやう徧へん知ち

だから、そなたらが心にみ仏みぶつを想おもう時とき、その心はみ仏みぶつの特長とくちやうである三十二相さんじにしやうと八十随形好はちじゆうしぎやうこうであり、その心はみ

仏ぶつとなり、その心はみ仏みぶつである。み仏みぶつの海うみのように深い智慧ちゑで表あらわれてくださる。

海かい・從じゆ心しん想ぞう生しやう・是ぜ故こ亦お当とう・一いつ心しん繫けん念ねん・諦たい觀くわん彼ひ仏ぶつ・多ただ陀だ阿あ伽か度ど・阿あ羅らか訶か・三さん藐みやく三さん仏ぶつ陀だ・想ぞう彼ひ仏ぶつ者しや・先せん

だから集中しゆうしゆうして阿あ弥み陀だ仏ぶつをはつきりと想おもい描えくのだ。阿あ弥み陀だ仏ぶつを想おもい描えくには、

どうぞうぞう へいもくかいもく けんいちほうぞう によえん ぶだんこんじき ざ ひけじよう けんぞうざい しんげんとつかい りようりようふんちよう けんごくめつ
当想像・閑目開目・見一宝像・如閻浮檀金色・坐彼華上・見像坐已・心眼得開・了了分明・見極樂

まず像を想い描くのだ。目を閉じてても開いても、金色に輝く仏像が蓮の花の上に座っておられるのを見るがよい。そ

れが出来ると心の目が開いて、極樂浄土の

国・七宝莊嚴・宝地宝池・宝樹行列・諸天寶幔・弥覆其上・衆宝羅網・満虚空中・見如此事・極令

七つの宝でできた大地や池や並木を見て、その上に宝の幔幕が覆い、大空には宝の網が覆われているのはつきりと

明了・如觀掌中・見此事已・復当更作・一大蓮華・在仏左辺・如前蓮華・等無有異・復作一大蓮

見るであらう。自分の手の中にあるかのようににはつきりと見えるようにするのだ。これが終われば、蓮華を今度は

あみだぶつ

阿弥陀仏の左側に想い浮かべよ。前の蓮華と同じ形と大きさだ。そして今度は阿弥陀仏の

あみだぶつ

け さいぶつうへん そういちかんぜんおんぼさつぞう ざ さけ ざ やくほうこんこう によぜんむい せういちだいせいしほさつぞう ざ うけ

華・在仏右辺・想一觀世音菩薩像・坐左華座・亦放金光・如前無異・想一大勢至菩薩像・坐右華

右側に蓮華を想い浮かべよ。左の蓮華の上には觀世音菩薩の像がお座りになり、阿弥陀仏と同じく金色の光を放つ

かんぜおんぼさつ

あみだぶつ

こんじき

ているのを想い浮かべよ。右の蓮華の上には大勢至菩薩の像がお座りなるのを想い浮かべよ。

だいせいしほさつ

ざ しせうじさうじ ぶつぼさつぞう かいほうこうみよう ごこうこんじき しやうしよほうじゆ いちいちじゆげ ぶうさんれんげ しよれんげじよう かく

座・此想成時・仏菩薩像・皆放光明・其光金色・照諸宝樹・一一樹下・復有三蓮華・諸蓮華上・各

かん

こんじき

この観が出来ると、これらの像は光を放つ。その光は金色で、宝の樹々を照らす。それぞれの樹の下にはまた三つの蓮華があつて、その蓮華の上には仏像一体と

ぶつぞう

ういちぶつ にほさつぞう へんまん ひこく しそうじようじ きようじやどうもん すいるこうみよう ぎつしよほうじゆ ぶがんえんのう かいせつみようほう
有一仏・二菩薩像・徧滿彼国・此想成時・行者当聞・水流光明・及諸宝樹・亮鴈鴛鴦・皆説妙法・

ほさつ

こくらくじようど

こくらくじようど

菩薩二体がお座りになり、極樂浄土に満ちている。この想が出来ると、極樂浄土のせせらぎや光、宝の樹や鴨や雁

おしどり ぶつぽう

や鴛鴦が仏法を説くのを聞くことが出来る。

しゆつじようじゆうじよう こうもんみようほう きようじやしよもん しゆつじようしじ おくじふしや りようよしゆたらこう にかくふこうしや みよういもうぞう にかく
出定入定・恒聞妙法・行者所聞・出定之時・憶持不捨・令与修多羅合・若不合者・名為妄想・若

かん

ぶつぽう

ぎようじや

かん

その観に入ったときから出るときまで、ずっと仏法が聞けるのだ。行者が聞いたことは、観が終わつても忘れないよう

きようてん

にし、經典と照らし合わせてみよ。もし合わなければそれは妄想である。もし合えば、

うこうしや みよういせそう けんこくらくせかい ぜいぞうそう みようたいはちかん させかんしや じよむりようおっこう しようじしさい お
有合者・名為鹿想・見極樂世界・是為像想・名第八観・作是観者・除無量億劫・生死之罪・於

こくらくじようど

ぞうぞう

かん

かん

むりようおっこう

ほば極樂浄土を見たと言える。これを像想といい、第八の観と名付ける。この観ができれば、無量億劫の迷いの罪が

けんしんじゆう とくねんぶつさんまい

現身中・得念仏三昧・

消え、この身のままで念仏三昧に入ることができる。」

ねんぶつさんまい

しんじゆふん じせせん しんしんかん
正宗分 定善 真身観

あみだぶつ

阿弥陀仏の真のすがたを想う

ぶつこうあなん きゆういだいけ しせうじようい しとうきようかん むりようじゆぶつ しんせうこうみよう あなんとうち むりようじゆぶつしん によひやく
仏告阿難・及韋提希・此想成已・次当更觀・無量寿仏・身相光明・阿難当知・無量寿仏身・如百千

しゃか

あなんそんじや いだいけぶにん

かん

あみだぶつ

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せになりました。「この觀ができたならば、次は更に阿弥陀仏の身体と光

を想い描くがよい。阿難よ、よく知つていなさい。阿弥陀仏の身体は百千万億の

まんのか やまてん えんぶだんごんじき ぶつしんこう ろくじゅうまんのく なゆた こうがしや ゆじゆん みけんびやくこう うせんえんでん によこ

万億・夜摩天・閻浮檀金色・仏身高・六十万億・那由他・恒河沙由旬・眉間白毫・右旋婉轉・如五

やまてん

なゆたこうがしや ゆじゆん

びやくこう

夜摩天の黄金のように輝き、高さは六十万億那由他恒河沙由旬である。眉間の白毫は、右周りで、大きさは

しゆみせん ぶつげんによしだいかいすい しようびやくふんみさう しんしよもうく えんすいこうみまう によしゆみせん ひぶつえんこう によひやくおく さんせん
須弥山・仏眼如四大海水・青白分明・身諸毛孔・演出光明・如須弥山・彼仏円光・如百億・三千

しゆみせん

ほとけ

しゆみせん

須弥山五つ分である。み仏の眼は四つの海のように広く、澄みきつている。身体の毛穴からは光が出て、須弥山のよ

あみだぶつ

さんぜんだいせんせかい

うである。また、阿弥陀仏の頭の後ろにある円い光は、百億の三千大千世界の様である。

だいせんせかい おえんこうじゆう うひやくまんのく なゆた こうがしやけぶつ いちいちけぶつ やくうしゆだ むしゆけぼさつ い
大千世界・於円光中・有百万億・那由他・恒河沙化仏・一一化仏・亦有衆多・無數化菩薩・以為

なゆたこうがしや

ほとけ

ぼさつ

その光の中に百万億那由他恒河沙の我々に合わせて変化されたみ仏がおられ、さらにそれぞれに菩薩が付き

じしや むりようじゆぶつ うはちまんしんせう いちいちせう かくうはちまんしん ずいぎようこう いちいちこう ぶ うはちまんしんこうみよう

侍者・無量寿仏・有八万四千相・一一相・各有八万四千・随形好・一一好・復有八万四千光明・

あみだぶつ

添われている。阿弥陀仏は八万四千のすぐれた所がある。それぞれに八万四千のすぐれた特徴があり、それぞれ

に八万四千の光が放たれている。

いちいちこうみょうへんじょう じつぼう せかい ねんぶつしゆじょう せつしゆふしや ごこうみょうそうこう きょうよく けぶつ ふかく せつ たんとう おくそう
一一光明徧照・十方世界・念仏衆生・攝取不捨・其光明相好・及与化仏・不可具説・但當憶想・

それぞれの光はすべての世界の念仏の人々を照らし、摂め取つて捨てることがない。その光と特徴とみ仏について詳
しく説き述べることができない。ただ深く想い、

令心眼見・見此事者・即見十方・一切諸仏・以見諸仏故・名念仏三昧・作是觀者・名觀一切仏身・

心の眼で見るのだ。これを見るものは、すべての仏がたを見るといふことだ。すべての仏がたを見るので、念仏三昧
と名付ける。この觀ができればすべてのみ仏の姿を觀ると言える。

いかなぶつしんこ やつけんぶつしん ぶつしんしや だいじひせ いむえんじ せつしゆじゆじょう きしかんしや しやしんたせ しやうしよぶつ
以觀仏身故・亦見仏心・仏心者・大慈悲是・以無緣慈・攝諸衆生・作此觀者・捨身他世・生諸仏

み仏の姿が見えたのだからみ仏の心も見るができる。み仏の心とは大慈悲心のことである。縁なきものも慈悲
の心ですくうだ。この觀ができれば、いのちが終わり、次の生では、仏がたの前に生まれ、

ぜんとくむしようにん せこちしや おうとうけん たいかんむりようじゆぶつ かんむりようじゆぶつしや じゆいちそうこうにゆう たんかんみけんびやくこう
前・得無生忍・是故智者・亦當繫心・諦觀無量壽仏・觀無量壽仏者・従一相好入・但觀眉間白毫・

阿弥陀仏のお徳を得ることがができる。だから、智慧のあるものは、心を集中してはつきりと阿弥陀仏を想い描くの
だ。阿弥陀仏を想い描こうとする者は、一つの特徴から想い描くがよい。ただ眉間の白毫をはつきりと

極令明了・見眉間白毫者・八万四千相好・自然当現・見無量壽仏者・即見十方・無量諸仏・得見

極令明了・見眉間白毫者・八万四千相好・自然当現・見無量壽仏者・即見十方・無量諸仏・得見

極令明了・見眉間白毫者・八万四千相好・自然当現・見無量壽仏者・即見十方・無量諸仏・得見

極令明了・見眉間白毫者・八万四千相好・自然当現・見無量壽仏者・即見十方・無量諸仏・得見

極令明了・見眉間白毫者・八万四千相好・自然当現・見無量壽仏者・即見十方・無量諸仏・得見

想い浮かべよ。それができれば、八万四千の特徴が自然と現れるはずだ。こうして阿弥陀仏を想い描けたなら、

すべての仏がたも観る事ができたことになる。

無量諸仏故・諸仏現前授記・是為徧觀・一切色身想・名第九觀・作此觀者・名為正觀・若他

あみだぶつ

阿弥陀仏を観る事ができたので、仏がたは目の前で行者が悟りを得ることを約束してください。これをすべての

ほとけ

仏がたを想い描く想といい、第九觀と名付ける。この觀ができれば正觀であり、

かんしや みよういじやかん

觀者・名為邪觀・

もし他を観るならば邪觀である。」

じやかん

キン三打

正宗分 散善 上品…上品上生について

じようぼんじようしやう

。仏告阿難・及韋提希・上品上生者・若有衆生・願生彼國者・發三種心・即便往生・何等為三・一者

しやか あなんそんじや いだいけぶにん

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せになりました。「上品上生とは、もし極樂浄土に生まれたいと願うも

ごくらくじやうど

のは、三種の心を起こして往生をする。一つには至誠心、

おうじようしん

至誠心・二者深心・三者廻向發願心・具三心者・必生彼國・復有三種衆生・當得往生・何等為三・

しじようしん にしやじんしん さんじやえこうほつがんしん ぐさんじんしや ひつしやうひこく ぶ うさんじゆしゆじやう どうとくおうじやう がどういさん

二つには深心、三つには回向發願心である。これらを具える者は必ず極樂浄土に生まれる。また、三種の行を修め

るものは往生をすることができる。その三種とは、

一者慈心不殺・具諸戒行・二者誦誦大乘・方等經典・三者修行六念・廻向發願・願生彼國・具此

一つには慈しみの心でおやみに殺さず戒を守つて修行をする者、二つには大乘經典を称える者、三つには仏・法・

僧・戒・施・天の六念の行を修める者である。この功德をもつて極樂浄土に生まれたいと願ひ、

くどくいちにちないししちにち　そくどくおうじよう　しやうひこくじ　しにんしやうじんゆうみまうこ　あみだによらい　よかんぜおん　だいせいし

功德・一日乃至七日・即得往生・生彼國時・此人精進勇猛故・阿弥陀如来・与觀世音・大勢至・

一日から七日の間この功德を積むのならば直ちに往生ができる。極樂浄土に生まれる時、この者が懸命に努力を

したので、阿弥陀仏は觀世音菩薩と大勢至菩薩、

むしゅうけぶつ　ひやくせん　ひく　しやうもんだいしゆ　むしゅうしよてん　しつぽうくでん　かんぜおんぼさつ　しつこんごうだい　よだいせいし　ぼさつ　し

無數化仏・百千比丘・声聞大衆・無數諸天・七宝宮殿・觀世音菩薩・執金剛台・与大勢至菩薩・至

數え切れない仏がた、百千の修行者や声聞達、數え切れない天人達が七つの宝で出来た宮殿と共においでになる。

かんぜおんぼさつ　こんごう　だいせいし　ぼさつ　だいせいし　ぼさつ　と　共に

觀世音菩薩は金剛の台をささげて、大勢至菩薩と共に

行者前・阿弥陀仏・放大光明・照行者身・与諸菩薩・授手迎接・觀世音・大勢至・与無數菩薩・讚

きようじやせん　あみだぶつ　ほうだいこうみやう　しやうさうじやしん　よしよぼさつ　じゅうしゅうこうしやう　かんぜおん　だいせいし　よむしゅうぼさつ　さん

行者前・阿弥陀仏・放大光明・照行者身・与諸菩薩・授手迎接・觀世音・大勢至・与無數菩薩・讚

21

その者の前においてになる。阿弥陀仏は大きいなる光を放ちその者の身を照らし、菩薩たちと共に手を差し伸べてお

迎へになる。観世音菩薩と大勢至菩薩は、数え切れない菩薩達と共にその者を讃へ、

歎行者・勧進其心・行者見已・歡喜踊躍・自見其身・乗金剛台・随従仏後・如弹指頃・往生彼国・

その心を励まされる。その者は来迎を見て躍り上がって喜び、自分を見ると金剛の台に乗り、み仏の後に続き、指

を弾く間に極樂浄土に往生する。すると、

生彼国已・見仏色身・衆相具足・見諸菩薩・色相具足・光明宝林・演説妙法・聞已即悟・無生法

阿弥陀仏の様々な特徴と菩薩たちの特徴を見る。光の宝の林が仏法を説き、聞き終わると阿弥陀仏のお徳を得、

忍・経須臾間・歷事諸仏・徧十方界・於諸仏前・次第授記・還到本国・得無量百千・陀羅尼門・

わずかな間に仏がたの世界を見てまわり、すべての世界を周り、諸仏から悟りを得ることを約束される。極樂

浄土に還つてくると、計り知れない善を行う道を得る。

是名上品上生者・

これを上品上生と名付ける。

正宗分 散善 下下品…下品下生について

ぶつこうあなん きゆういたいけ げぼんげしようしゃ わくうしゅうじよう さふせんこう ごぎやくじゅうあく ぐしよふせん よしぐにん いあくこう
仏告阿難・及韋提希・下品下生者・或有衆生・作不善業・五逆十惡・具諸不善・如此愚人・以惡業

しゃか あなんそんじや いたいけぶにん

げぼんげしよう

ごぎやくじゅうあく

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「下品下生というのは、五逆十惡を行い、諸々の惡を犯している。このような愚かな者は、その報いで

こ おうだあくどう きやうりやくたこう じゆくむく よしぐにん りんみようじゆくじ ぐうぜんちしき しゆくじゆあん に いせつ みようほう きよりよう
故・忒墮惡道・經歷多劫・受苦無窮・如此愚人・臨命終時・遇善知識・種種安慰・為說妙法・教令

悪い世界に墮ちる。計り知れない長い時間をかけて、極まりない苦しみを受ける。このような愚かな者が命を終え

ぜんちしき

ほどけ

ようとすると、善知識に遇い、いろいろと心安らぐ教えを聞き、み仏を念じることを教えられる。

ねんぶつ しにんくひつ ふおうねんぶつ ぜんぬこうこん によやくふのうねんしや おうしようむりようじゆくぶつ によせしれん りようしようふせつ ぐせく
念仏・此人苦逼・不遑念仏・善友告言・汝若不能念者・忒稱無量壽仏・如是至心・令声不絶・具足

ほどけ

ぜんちしき

しかし、その者は臨終の苦しみでみ仏を念じることができない。善知識は言われた。「そなたがもし、念じることが

むりようじゆくぶつ

できなければ、無量壽仏の名を称えなさい。」こうして、その者が、心から声を続けて

じゆくねん しまうな もあ みだぶつ しようぶつみようこ おねんねんじゆく じよはちじゆくおつこう しようじしさい みようじゆくしじ けんこんれんげ
十念・称南無阿彌陀仏・称仏名故・於念念中・除八十億劫・生死之罪・命終之時・見金蓮華・

なもあみだぶつ

おつこう

南無阿彌陀仏と十回称えると、そのことにより、八十億劫の迷いの罪が消える。命が終わるとき、金の蓮華が

ゆにょにちりん じゆくにんぜん によいちねんきよう せくとくおうじよう ごくらくせかい おれんげちゆう まんじゆうにだいこう れんげほうかい かんぜ
猶如日輪・住其人前・如一念頃・即得往生・極樂世界・於蓮華中・滿十二大劫・蓮華方開・觀世

太陽のように輝き、その者の前に現れるのを見ると、すぐに極樂淨土に生まれることが出来る。蓮の花に包まれて、

十二大劫が経つと、花が開く。観世音菩薩と

音・大勢至・以大悲音声・為其広説・諸法実相・除滅罪法・聞已歡喜・忒時即発・菩提之心・

大勢至菩薩は大慈悲の声でその者の為に、世界の見方と罪を除く教えを説かれる。その者はそれを聞き、喜び悟

りを求める心を起こす。

是名下品下生者・是名下輩生想・名第十六観・

これを下品下生の者という。これらを下品の往生の想といい、第十六観と名付ける。」

得益分…利益を得る

説是語時・韋提希・与五百侍女・聞仏所説・忒時即見・極樂世界・広長之相・得見仏身・及二菩

釈迦様がこのようにお説きになると、韋提希夫人は五百人の侍女と共に釈迦様の教えを聞いて、すぐに極樂

浄土の広大な光景を見ることができました。阿弥陀仏や観世音菩薩や大勢至菩薩も拝見することができました。

薩・心生歡喜・歎未曾有・廓然大悟・得無生忍・五百侍女・発阿耨多羅・三藐三菩提心・願生彼

心から喜び、これほどまでに尊いものはないと讃え、迷いが晴れて、阿弥陀仏のお徳を得ました。五百人の侍女も

この上ない悟りを求める心を起こして、極樂浄土に生まれたいと願いました。

くく せせんしつき かいどうおうじよう しようひこくい とくしよぶつげんぜんさんまい わりようしよてん ほつむじようどうしん
國・世尊悉記・皆当往生・生彼國已・得諸仏現前三昧・無量諸天・發無上道心・

しゃか

お釈迦様は悉く約束されました。皆往生し、極樂淨土に生まれ、諸仏が現れ成仏を予告されました。数え切れ

てんにん

ない天人達もこの上ない悟りを求める心を起こしました。

るすうぶん

あなんそんじや

流通分…阿難尊者がこの教えの要は何かを問う

にじあなん そくじゆうさき ぜんびやくぶつこんせん とうがみようしきよう しほうしよう どううんがじゆじ ぶつごうあなん しきようみよう
爾時阿難・即從座起・前白仏言世尊・当何名此經・此法之要・当云何受持・仏告阿難・此經名

あなんそんじや

しゃか

しゃか

その時阿難尊者は立ち上がり、お釈迦様の前に進み申し上げました。「お釈迦様、この教えは何と名付けましよう

あなんそんじや

か。この教えの要はどのように保てばよいでしょうか。」お釈迦様は阿難尊者に仰せられました。「この教えは

かん ごくらつこくと わりようじゆぶつ かんぜおんぼさつ だいせいしほさつ やくみようじようじさうしよう しようしよぶつぜん によどうじゆじ わりよう

觀・極樂国土・無量寿仏・觀世音菩薩・大勢至菩薩・亦名淨除業障・生諸仏前・汝当受持・無令

ごくらくじようど

わりようじゆほとけ

かんぜおんぼさつ

だいせいしほさつ

かん

【極樂淨土と無量寿仏と觀世音菩薩と大勢至菩薩を觀ずる經】と名付け、また【これまでの罪を除き、仏がたの

ほとけ

前に生まれる經】と名付ける。そなたはこの教えを保ち、忘れることがないように。

もうしつ きようしさんまいしや げんしんとつけん わりようじゆぶつ きゆうにだいじ にかくせんなんし ぜんによにん たんもんぶつみよう にぼさつみよう じよ

忘失・行此三昧者・現身得見・無量寿仏・及二大士・若善男子・善女人・但聞仏名・二菩薩名・除

ほとけ

ざんまい

わりようじゆぶつ

かんぜおんぼさつ

だいせいしほさつ

このみ仏を觀る三昧を行う者は、この世で無量寿仏と觀世音菩薩と大勢至菩薩を拝見することがでさる。もし善

わりようじゆぶつ

かんぜおんぼさつ

だいせいしほさつ

良な者達が、ただ無量寿仏の名と觀世音菩薩と大勢至菩薩の名を聞くだけでも、

むりようこう しようじしがい がきようおくねん にやくねんぶつしや どうちしにん ぜにんじゆう ふんだりけ かんぜおんぼさつ だいせいしほ
無量劫・生死之罪・何況憶念・若念仏者・当知此人・是人中・分陀利華・觀世音菩薩・大勢至菩

26

計り知れない迷いの罪が除かれるのだから、念ずるならばなおさらである。もし念仏する者は、知るがよい。その者

は、白く清らかな蓮華のような尊い人である。觀世音菩薩と大勢至菩薩は

さつ いごしよう どうざどうしよう しようしよぶつ ぶつこうあなん によこうじせご じせごしや せくぜじむりようじゆぶつみう ぶつせつ
薩・為其勝友・当坐道場・生諸仏家・仏告阿難・汝好持是語・持是語者・即是持無量寿仏名・仏説

勝れた友となり、悟りの場に座り、諸仏の家である極樂浄土に生まれる。」お釈迦様は阿難尊者に仰せられました。

「そなたはしっかりと心にとどめておくがよい。心にとどめるとは、阿弥陀仏がかならずすくうと南無阿弥陀仏の

念仏として皆に届いていることを聞くのだ。今ここで、阿弥陀仏がはたらいっておられると念仏を称えて聞くのだ。」

しごじ そんじやもつけんれん あなんきゆういだいけどう もんぶつしよせつ かいだいかんき
此語時・尊者目犍連・阿難及韋提希等・聞仏所説・皆大歡喜・

お釈迦様が説かれた時、目連尊者や阿難尊者、韋提希夫人達はこれを聞き、皆大いに喜んだのです。

きしやくせん
耆闍分…お釈迦様が耆闍崛山に帰り、教えを説く

にじせそん そくぶ こく げんきしやくつせん にじあなん こういだいしりう せつによじようじ むりようしよてん きゆうりゆうやしや
爾時世尊・足歩虚空・還耆闍崛山・爾時阿難・広為大衆・説如上事・無量諸天・及竜夜叉・

その時、お釈迦様は空中を歩んで耆闍崛山にお帰りになされました。阿難尊者は大衆の為にお釈迦様の教えを説

き、計り知れない天人達や龍や夜叉も、

26

もんぶつしよ　せつ　かいだいかんぎ　らいぶつに　たい
聞仏所―説・皆大歡喜・礼仏而―退

教えを聞いて喜び、お釈迦様に礼拝して歸りました。

ぶつせつかんむりようじゆきよう

仏説觀無量壽經　キン一打

なもあみだんぶ　●南無阿弥陀仏　なもあみだんぶ　南無阿弥陀仏　なもあみだんぶ　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

なもあみだんぶ　南無阿弥陀仏　なもあみだんぶ　南無阿弥陀仏　な

がんにきじようじゆ　ほうど

○願力成就の報土には

じりき　しんぎよう

●自力の心行いたらねば

だいしようしよつにん

大小聖人みなながら

によらい　ぐせい　じよう

如来の弘誓に乗ずなり

ほんのうぐせく　しんち

○煩惱具足と信知して

ほんがんにき　じよう

●本願力に乗ずれば

えしん

すなわち穢身すてはてて

あみだぶつ　ほんがんにき　ごくらくじようど

阿弥陀仏の本願力で完成した極樂浄土へは

ほんのう

煩惱がすぐ起こる自分の力では行くことができません。

ぶつどう

様々な仏道を歩む素晴らしい方々もみな

あみだぶつ

阿弥陀仏のすくいにおまかせするのです。

自分は弱い人間であると深く気づいて

阿弥陀仏のすくいにまかせるならば

さまざまな苦しみ悩みの身を捨てて

法性常樂証せしむ

苦から解放された本当の樂を味わえるのです

がんにしくどく

○願以此功德

びやうどうせいっさい どうほつぼだいしん

おうじやうあんらつこく

●平等施一切同発菩提心

往生安樂国

あみだによらい

びやうどう

あみだによらい

あんらく ぎやく

どうかこの阿弥陀如来の功德によつて

平等に届く阿弥陀如来の御名を聞き 共にこれをよろこび

安樂(極樂)

じやうど おうじやう

浄土に、往生させていただきましよう

キン三打 經本を頂く・合掌・礼拝

ごぶんしやう

ほんがんにじ

れんによしやうにん

御文章

本願寺第八代目宗主蓮如上人(二四一五〜一四九九)が記された手紙。二〇〇通を超える

しやうにんいちちゆうしやう

聖人一流章

しやうにんいちちゆう

ごかんけ

おもむき

聖人一流の御勸化の趣は、

しんじん

ほん

そうろう

信心をもつて本とせられ候。

ゆえ

その故は、もろもろの雜行をな

そうぎやう

しんらんしやうにん

じやうどしんしゆう

親鸞聖人が示された浄土真宗の教えで大切

あみだによらい

しんじん

な所は、阿弥陀如来より賜る信心です。その

理由は、自分の力には限界があることを知

げすてて、一心に弥陀に帰命す
いつしん みだ きみよう

れば、不可思議の願力として、
ふかしぎ がんりき

ぶつ かた おうじよう じじよう

仏の方より往生は治定せしめ

たまう。その位を、一念發起。
くらい いちねんぼつき

にゆうしようじようしじゆ

入正定之聚とも釈し、その上
しやく うえ

の称名念仏は、如来わが往生
しようみようねんぶつ によらい おうじよう

を定めたまいし、御恩報尽の
さだ ごおんほうじん

念仏と心得べきなり。
ねんぶつ こころう

らされ、さまざまな修行を捨てて、阿弥陀仏
あみだぶつ

のすくいにおまかせしますと心から思うな
あみだぶつ

らば、阿弥陀仏の力により、極樂浄土に生ま
ごくらくじょうど

れることが決まります。その境地は、次の世
ほとけ

に仏となることが定まる弥勒菩薩と同じで
みろくぼさつ

す。今ここが、すくいのご真ん中です。その

上で南無阿弥陀仏と称えることは、
なもあみだぶつ

阿弥陀仏はよくぞこの私を見捨てることな
あみだぶつ

く声をかけ続けて下さいましたと頂きました

よう。

じょうとしんしゅう

浄土真宗のすくいよろこび

あみだによらい ほんがん

阿弥陀如来の本願は

かならずすくうまかせよと

なもあみだぶつ な

南無阿弥陀仏のみ名となり

わたし

たえず私によびかけます

こえ き

このよび声を聞きひらき

によらい

如来のすくいにまかすとき

とは き ともしび

永遠に消えない灯火が

わたし こころ

私の心にともります

によらい だいひ い

如来の大悲に生かされて

御恩報謝のよろこびに
ごおんほうしゃ

南無阿弥陀仏を称えつつ
なま あみだぶつ とな

真実の道を歩みます
まこと みち あゆ

この世の縁の尽きるとき
よ えん つ

によらい じやうと う

如来の浄土に生まれては

さどりの智慧をいただいて
ち え

あらゆるいのちをすくいます

宗祖親鸞聖人が
しゅうせしんらんしやうにん

によらい まこと しめ

如来の真実を示された

じやうとしんしゅう おし

浄土真宗のみ教えを

ども ひろ

共によりこび広めます

観無量寿経とは

かんむりようじゆきよう

かんぎよう

浄土三部経の一つで「観経」とも言います。

じようどさんぶきよう
おうしやじよう
あじや

古代インドのマガダ国の首都王舎城で阿闍

世王子が父を殺し、母を軟禁するという事

件が起きました。今でいう家庭内暴力が起

きたのです。

母の韋提希夫人がお釈迦様にすくいを求

め、阿弥陀仏の極楽浄土に生まれたいと願

います。お釈迦様はその方法を説かれ、そ

れができない者のために南無阿弥陀仏と念

仏を称える事を勧められます。

いだいけぶにん
しやか
あみだぶつ
ごうらいじようど

しやか
なもあみだぶつ

しやか

しやか

しやか

しやか

しやか

しやか

しやか

読み方などわからない場合は、YOUTUBE「西
光寺チャンネル」を参考にして下さい。その他の
勤行・節談説教・紙芝居・アニメも配信しています

西光寺チャンネル



観無量寿経法事用



浄土真宗本願寺派西光寺

千葉県市原市根田七三二一

TEL 〇四三六―二二―七四二二

✉ saikohji@saikohji.net

HP 「市原市 西光寺」で検索かQRで

